

北の山ではすでに始まっている

先日、利尻島を訪れた。初めて訪れたのは1975年だから、すでに26年経過した。当時は「カニ族」と呼ばれる一見放浪者風の若者が多かったが、今は中高年のオバさんが、我が物顔に闊歩している。

渡島も当時は、小型船の船底に揺られたが、今は大型バスが10数台積める大型フェリーで極めて快適。もはや「秘境」のイメージは失せた。

バスに乗ると利尻岳鴛泊コースを登ってきた登山者がいた。話を聞いているとどうも「黄金運搬」の話のようだ。ガイドもいたので正してみると、鴛泊コースのある利尻富士町では、昨年からは一般登山者に「黄金運搬・持ち帰り」（今後「黄金回帰」で統一したい）をお願いしているという。

利尻岳は標高1721mの山だ。普通の登山者なら十分日帰りが出来る山である。しかし、標高差が大きいため、朝食を摂らない早朝出発が多い。結果、八合目の避難小屋付近で用を足す登山者が増え、周辺が非常に汚れてきた。

町では昨年、携帯トイレを登山者に渡し「黄金回帰」を期待したが、「する」場所がないと指摘され、今年度は避難小屋の裏に「する」場所を設置した。

基本的には大だけでなく小も対象。携帯トイレは全くの偶然だったが、私達もいつも使っている「サニタ・クリーン」だ。

これは旅館、民宿、登山口で無料で配られている。用を足したら登山口まで回帰し「黄金ポスト」に入れる。これを町が毎日回収して焼却している。

この時バスにいた登山者は12名。「黄金回帰」した人は2名。他は小のみだった。まだ始まったばかりなので「回収率」などデータはないが、現在のところ避難小屋周辺はますますの美しさを保っているとのことだ。

少し前、テレビで富士山頂の環境指向型のトイレの紹介をしていた。「杉チップ」で黄金を分解する方式と言っていた。

しかし、いくら分解しようが何しようが、何がしかの物は残る。それらは結局山に流される訳だ。低温が続く季節はどうするのか。

そうしてみると、やっぱり「黄金回帰」が最上の方法と思われる。どうして富士山でそれを試みないのか。登山者が多いからむしろやるべきではないか。

数年前、北岳御池小屋が雪崩で流された。いま芦安の清水君が再建メンバーに名前を連ね再建に奮闘している。

これは非常にいい機会だから是非御池小屋でも「黄金回帰」を採用してもらいたい。簡易トイレ代は200円の有料でよい。この機会に妥協したら孫子の代まで悔いを残すだろう。

「山には何も持ち込まない。そして、何も残さない」北の山で、その運動が今静かに始まっている。

[NO-64 01-07-20]

